



青森

# 津軽の風土が育んだ 刺し子の文化を 世界に！

弘前こぎん研究所

弘前こぎん研究所（青森県弘前市大字在府町、成田貞治社長、0172・32・0595）は、昭和17年に青森ホームスパンとして誕生。「こぎん」とは、津軽地域の農村で明和（1764年頃）に生まれた異色の刺繍である。津軽の冬は厳しい寒さになるにもかかわらず、歴代弘前藩主が農民に木綿の衣類を禁じる儉約令を発したことで、庶民が自家製麻布を藍で染め、白綿糸で刺し、補強と防寒効果を高めた衣服を仕立てたことから技法が発達した。昭和初期、安価な綿布の普及により廃れ始めたその伝承を、手仕事の美しさとして柳宗悦氏（民芸運動創始者）に見出された。伝統技法を守るべく、現在も多彩な製品を製造・販売している。

同研究所は、日本初モダニズム建築として知られる近代建築の巨匠前川國男氏の第1作目の作品である木村産業研究所（コルビュジェ風白亜の建物・平成16年6月国登録有形文化財指定）と由緒ある建物の中に事務所を構え、津軽の情熱を発信し続けている。



エレガントさに「こぎん」のもつ繊細さと力強さが見事に融合したコート



手仕事の素晴らしさを熱く語る成田社長

る。麻の布目を数え、奇数の目数で刺し描かれる幾何学模様的美しさの基礎模様は、「モドコ」と呼ばれ、40程度度の小さな模様を組み合わせることでデザインは無限大に広がり、独特な紋様を施された製品は洗練された作品となる。昨年有名デザイナーとコラボレーションし、最新モードのコートの袖に伝統ある津軽こぎん刺しを施した。30着がすぐに完売したほか、大きな模様をあしらった巻スカートも現在のファッションと見事に調和。また、実用的かつ趣味で使えるオシャレなニューアイテムとしてカメラケースを手がけるなど、従来の巾着、帯、バック、ネクタイ、くるみボタン等の小物に加え、さまざまな分野で好評を得ている。

北国の繊細さと力強さを象徴する素朴で美しい作品を、是非皆さまのアイテムに加えていただければと思います。ご要望によりオリジナル品もお作りしますのご相談ください。